

ブラキムラとめぐる！仙台城下町ボヤージュ 〔2024年5月7日放送分・名掛丁／日吉町〕

毎月第1火曜日に放送しています。歴史家で街歩きの達人・ブラキムラこと木村浩二さんと、旧城下町に88本ある石柱＝辻標から歴史の痕跡を探る旅です。街歩きのお供には、仙台市役所1階の市政情報センターなどで販売中の冊子、その名もズバリ「辻標」が便利です。88本ある辻標の場所や周辺の歴史が、写真とともに分かりやすく解説されています。

- 「東番丁に行く！」シリーズは今回で5回目。前回ご紹介した「東五番丁／新伝馬町」の辻標から横断歩道を渡ってすぐ東側にある「名掛丁／日吉丁」の辻標から、街歩きスタートです。
- 名掛丁はアーケードの名前にもなっていますが、聞き慣れないのは日吉丁のほうですね。僕も今回、初めてこの名前を知りました(汗)。現在、大通りとなっている東五番丁は、かつて名掛丁にぶつかる行き止まりでした。北側に抜けられないのは不便だということで、明治時代に周辺の土地を所有していた日野屋と吉岡酒造、2軒の店が市に寄付する形で道を通したのです。両方の店の字をとって「日吉丁」というわけです。その名前は、辻標のそばのビル「日吉第一ビル」にはっきり残されています。



- 辻標のもう片面「名掛丁」は、常陽銀行仙台支店から東へ、現在はアーケードとなっている通りです。仙台駅にぶつかって終わりと思っている方も多いでしょうが、線路を越えて東側へ…東七番丁まで続く東西の通りです。江戸時代、藩主が特に「名をかけて」取り立てた武士達の街です。新伝馬町の時にご紹介したように、ここは城下の東西物流の軸であり、防衛上もたいへん重要な地域だったのです。



- というわけで今回、私と木村さんは仙台駅を地下道で越えて、名掛丁を東へ歩きました。年配の方には懐かしいX橋の話も聞きつつ、たどり着いたのは「名掛丁 藤村広場」。作家の島崎藤村は明治29年(1896)、東北学院の教師として仙台に赴任。この場所にあった三浦屋という下宿に滞在し、処女詩集「若菜集」を執筆しました。広場の地面には、「若菜集」の表紙にあしらわれた蝶の模様がデザインされています。また、旧X橋の欄干を用いた記念碑もあります。仙台駅東側の名掛丁に、今も残る歴史のコンセキ。街歩きの際にぜひ、訪ねてみて下さい。

〈文・佐々木淳吾〉